

『本朝皇胤紹運録』写本の基礎的研究

Research Notes

小倉慈司

はしがき

皇室系図の代表的存在である『本朝皇胤紹運録』（以下、『紹運録』と略称する）は、塙保己一による叢書『群書類従』に収録されていることもあってよく知られており、研究に利用されてきているが、その史料性については必ずしも十分な検討がなされず、多くの場合はその記述を紹介するにとどまっている。『紹運録』にはこれまでも指摘されているように複数の写本系統があり、利用にあたってはそのことを考慮する必要があるが、これまで活字化されたものがすべて同系統のものであったこともあって、その点について配慮がなされることもほとんどなかった。ただし『紹運録』は写本による異同が大きく、その異同のすべてを検討の対象とすることは非常に困難である。そこで本稿においては、先行研究を整理しつつ『紹運録』の写本系統を大まかに把握し、今後の『紹運録』研究に資するため、まずは『紹運録』の原形に迫ることを第一の目標としたい。

一 『紹運録』の活字本と版本

先に述べたように、『紹運録』は『群書類従』に収録されているが、現在、研究者が一般に使用しているのは塙保己一が刊行した版本そのものではなく、後に版本をもとに手を加えられて刊行された活字本である。そこで、まず初めに、これまでに刊行された『紹運録』の活字本について述べておく。

- | | | | | |
|------|-----------|--------------|----------------------|----------------------|
| A | 『群書類従』四 | 初版 | 経済雑誌社 | 一八九三年 |
| B | 『群書類従』四 | 再翻刻 | 経済雑誌社 | 一八九八年 |
| B' | 『群書類従』四 | 三翻刻 | 経済雑誌社 | 一九〇三年 |
| C | 『新註皇学叢書』四 | 広文庫刊行会 | 一九二八年 | |
| D | 『新校群書類従』三 | 内外書籍 | 一九三〇年 ⁽²⁾ | |
| E | 『群書類従』五 | 初版 | 続群書類従完成会 | 一九三〇年 ⁽³⁾ |
| E' | 『群書類従』五 | 再版 | 続群書類従完成会 | 一九三七年 |
| E'' | 『群書類従』五 | 群書類従刊行会（酣燈社） | 一九五四年 | |
| E''' | 『群書類従』五 | 訂正三版 | 続群書類従完成会 | 一九六〇年 |

AとBは同じ田口卯吉氏による刊行であるが、初版本Aは森貞二郎氏が校合を担当し読みやすさが重視されたのに対し、再版本Bは黒板勝美氏が原本主義に徹して校訂・校合を担当し、新たに版を起こしたものであった(田口a b、井出a b)。⁽⁴⁾『紹運録』について見てみると、Aは版組は異なるものの、基本的に『群書類従』版本をそのまま翻刻したものであり、ただ年齢等、版本で小字とされている部分を丸括弧を使用してポイントと落とさず翻字している。⁽⁵⁾これに対しBでは『群書類従』版本が後陽成天皇の皇子女以降を「近代帝系数本及諸家記録等」によって補ったのに倣い、後桃園天皇の皇子女以降、一八九七年誕生の明治天皇皇女多喜子内親王までを「御近代皇統紹運録等」によって補い、また頭注に読点を打ったり、年齢等の小字をポイントと落として翻字している箇所がある等の違いがあり、版組もAとは若干異なる。BはBと同内容である。⁽⁶⁾

Cは物集高見氏の編纂によるシリーズに収録されたもので、同書「例言」によれば、群書類従本(版本を指すか)を底本とし、諸書により校訂頭注を加え、また「御近代皇統紹運録、元老院出版の御系譜及び経済雑誌社発行類従本等を参照して、光格天皇以下今上天皇」までを増補したという。したがって本文については、Bよりさらに末尾を昭和天皇皇女祐子内親王昭和三年(一九二八)三月八日薨去記事まで増補した他は、基本的にA Bと同じである。ただし版本およびA Bに存していた版本の頭注はそのまま翻刻せず、一部のみ文章表現を変えて掲載し、また版本には存在しない頭注を新たに付加したりもしている。⁽⁷⁾

Dは川俣馨一氏による刊行で、これまでの活字本に倣い、さらに昭和天皇皇女和子内親王昭和四年(一九二九)九月三〇日誕生の記事までを増補している。頭注についてはA Bに同じく版本通りに翻刻しており(ただし通して漢数字番号を振っている)、また本文末尾に図書寮所蔵の

写本三種および江戸初期版行の古版本(群書類従とは別)の奥書を翻刻している。

Eは太田藤四郎氏の統群書類従完成会による刊行で、これまでの活字本とは異なり一頁二段組としたため、版本の頭注は、「(頭)」との符号を付して本文の該当箇所が続いて記すという形式が採られた。末尾はDと同じ昭和天皇皇女和子内親王誕生記事まで(ただしその後C Dでは前に配列されていた昭和天皇の弟(雍仁親王・宣仁親王・崇仁親王)が配列されている)となっている。以上の点はE⁽⁹⁾にも受け継がれており、E⁽¹⁰⁾を収める訂正三版は収録書目によっては再校訂がなされているものの、『紹運録』に限っては全くEと同内容となっている。E⁽¹¹⁾も、紙型こそB 6判のE⁽¹²⁾と異なるA 5判であるが、版型自体はE⁽¹³⁾と同内容である。⁽¹⁴⁾

なお活字本の増補部分について付言しておく、同じ増補ではあってもC DとEでは全くの同文ではなく、例えばDが明治天皇について「大嘗祭明治四年十一月十七日。明治四十五年七月三十日崩御。宝算六十一。大正元年八月廿七日被_レ奉_二御追号明治天皇_一。同九月十四日奉_レ葬_二于京都府紀伊郡堀内村字古城山_一。称_二伏見桃山陵_一」⁽¹⁵⁾、また大正天皇について「同^(明治)廿年八月卅一日春宮宣下。(○中略)明治四十五年七月三十日御踐祚。大正四年十一月十日御即位。(○中略)大正十五年十二月二十五日崩御。宝算四十八。昭和二年一月廿日被_レ奉_二御追号大正天皇_一。同二月八日奉_レ葬_二于武蔵陵墓地之内。横山村大字下長房字龍ヶ谷戸_一。称_二多摩陵_一。」と注記する(Cもそれぞれ一字を除き同文。Cは二箇所「御追号」を共に「御諡号」とする)のに対し、Eは対応する箇所を「同^(明治)四年十一月十七日大嘗祭。同四十五年七月三十日崩。大正元年八月廿七日追_二号明治天皇_一。同年九月十五日葬_二伏見桃山陵_一」⁽¹⁶⁾、「同廿年八月卅一日為_二儲君_一」(中略)明治四十五年七月三十日踐祚。大正四年十一月十日即位。(中略)大正十五年十二月廿五日崩。昭和二年一月十九日追_二号

大正天皇^{タイシャウ}。同年二月八日葬「多摩陵」と記している。

以上、活字本は幕末以降の部分と注部分の形式の異同を除いて、基本的にすべて『群書類従』版を底本としていると言える。

次に版本について述べることにする。『紹運録』の版本は『群書類従』以外に四種類刊行されており、合計五種類存在する。

- a 古版本 寛永二〇年（一六四三）以降刊
- a' 一四冊本『諸家大系図』所収本 寛文年間以前刊
- b 『新板大系図』所収本 明暦二年（一六五六）刊
- c 『日本皇胤紹運録』 寛文一三年（一六七三）刊
- d 『本朝帝王正統録』 貞享二年（一六八五）刊
- e 『群書類従』所収版本 文化一〇年（一八一三）以降刊

a は刊行年次が不明であるが、末尾に長享二年（一四八八）中御門宣胤、天文八年（一五三九）および同一〇年吉田兼右、天正一九年（一五九一）一〇月一〇日梵舜の奥書を持ち、e の『群書類従』版本に対して「古板本」「古版本」と称されている（宮内庁書陵部所蔵速水行道校『紹運録』版本《二七一―七三》、花見等）。後陽成天皇の弟良恕法親王が寛永二〇年七月一五日に寂したことが記されているので、同年以降の刊行であることが知られる。a' は『尊卑分脈』の版本たる一三冊本『諸家大系図』に首巻として加えられたもので、『紹運録』自体は a と同版である。一三冊本は承応頃の刊行であるが、『寛文書籍目録』に「^{十四}諸家大系図」と見えることから、同目録刊行以前には『紹運録』が追加されていたと見られる（皆川）。

b は西道智により明暦二年に刊行された『新板大系図』に収録されるものである。この『新板大系図』は『諸家大系図』を増補したものと考

えられる（皆川）が、第二冊に「本朝皇胤紹運録」「天皇正統之系図」「帝王一統系図」が収録されている。この「本朝皇胤紹運録」は a・a' とは大きく内容が異なっており（宮内庁書陵部一九〇頁）、また「今上皇帝」として後西天皇が明暦二年に即位したことまでを記している。なお「天皇正統之系図」は後西天皇までの系図を天皇を中心として簡潔に記したものであり、「帝王一統系図」は「本朝皇胤紹運録」とは別系統の皇室系図を光仁天皇まで記したものである。

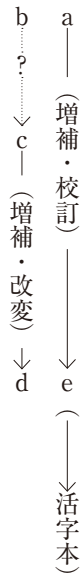
c は外題を「日本皇胤紹運録」とし、二冊本で巻末に寛文一三年二月吉旦に板行したと記されるもので、木竅散人の跋文によれば同人が「家々之類冊」を求めて校訂したものであるという。内容は b と同系統であるが、それをもとに『紹運録』以外の史料も含めて増補・改変しており、「当今」として靈元天皇までを掲載する。ただし古版本 a は参照しなかったように見受けられる。

d は外題を「本朝帝王正統録」とし、小本三巻三冊本である。小佐治半左衛門の開板で、序および跋によれば、一書林（半左衛門か）が寛文板行の『紹運録』（c）の改訂増補を一翠子（宮川道達、？一七〇一）に依頼して成ったものであるとのことであり、跋文は貞享乙丑（二年、一六八五）三月望の日付を持ち、内容上からも新院（後西院）が同年三月七日に泉涌寺に葬られた記事が含まれていて確認できる。

e は塙保己一によって『群書類従』巻六〇として刊行されたもので、上中下三冊よりなる。正確な刊行年次は不明であるが、後桃園天皇（およびその兄弟）までを掲載し、また本文中に後桜町院が文化一〇年間一月三日に崩御して二月一七日に泉涌寺に葬られたことが記されているので、それからまもなくの刊行と見られる。¹⁶奥書は存在しないものの、a と同じ後陽成院およびその兄弟までの系図を記した後に「右皇胤紹運録流布印本頗多誤脱、今以「古写二本」校正之、且新加「標注」以「備考証」云」と記しており、a を底本として校訂頭注を加え、その後、後桃園院

までの分を「拠近代帝系数本及諸家記録等補」ったという。校正に使用した古写本がどのようなものであったかは明言されていないが、綏靖天皇皇子常津彦某兄命の頭注に「按、常津彦其兄命、古事記作常根津日子伊呂泥命、則息石耳命一名也」、後陽成帝御本不載之、可從、孝元天皇皇孫屋主忍男武雄心命の頭注に「按、屋主忍男武雄心命、印本并石清水祠官系図、男作命為二人名、後陽成帝御本為一人、今拠日本紀以彦太忍信命為武内宿禰之祖父、為二人者誤也、但御本脱男字」、拠日本紀・釈日本紀補之、光孝天皇皇女源緩子の頭注に「按、緩子、後陽成帝御本・紀略・要記・皇代記作綾子、三代実録・編年記・皇胤系図同本書、紀略延本八年十月四日光孝天皇第一源氏綾子卒、号松尾院君」と見え、その一つが「後陽成帝御本」と呼ばれる写本であったことが知られる。⁽¹⁷⁾ 宮内庁書陵部には表紙に「本朝皇胤紹運録^{後陽成帝御本}」と記す和学講談所旧蔵本が蔵されており〔函架番号二七一—六九 宮内庁書陵部二〇七頁参照〕、「後陽成帝御本」とはこれを指すものと見られる。

以上、版本の概略を紹介したが、要するに版本としての系譜関係をまとめると左ようになる。



版本の系統は大きく二つに分かれるが、このうちa古版本を校訂および増補する形でe『群書類従』版本が作成され、さらに活字本に受け継がれる。一方、bはaとは別系統の写本を翻刻し、c(およびd)はbを直接参照したか否かは定かでないが、bと同系統の内容にさらに他史料によって記事等を増補改変したものとなっている。a bが底本とした写本の系統については第三・四節において述べることにしたい。

二 『紹運録』研究の現状

本節ではこれまでの『紹運録』の写本に関する研究の到達点について紹介する。

まず『紹運録』の作者および成立時期についてであるが、『薩戒記』応永三三(一四二六)年五月一四日条に、

今夜内府持参帝王御系図草(依仰所新作也)覧之、三位中
^(洞院満季)
将曰、件御系図自往古不一決事等多之、今度可被決之也者
予可示、

とあり、また「西山内府満季公筆、銘後小松院宸筆歟」とされる写本のあったことが一写本の奥書により知られるので、この時、洞院満季(一三九〇?)によって作成されたと見られる(菅、八代三九〇四三頁等)⁽¹⁹⁾。『紹運録』が後小松上皇の勅命によって撰進された事情については、当時の天皇歴代がちょうど一〇〇代に満ちたこと(当時の数え方で後小松天皇が一〇一代)や南北朝が合体し皇統が統一されたことが考えられるとされ(村田b)、またこの時期、称光天皇(後小松上皇皇子)の病気が進行しつつあり、皇位継承問題が深刻化していたことも指摘されている(松蘭)⁽²⁰⁾。「銘後小松院宸筆」との記述等により、「本朝皇胤紹運録」という書名も後小松上皇によって名づけられた可能性が高い(嗣永)⁽²¹⁾。この書名については中国の『歴代帝王紹運図』に倣ったのではないかと推測されている(宮内庁書陵部二〇二頁)。満季の養父にあたる公定が作成した『尊卑分脈』との密接な関連が想定されるものの、現段階では不明と言わざるを得ない。

次に写本に関しては、諸写本により異同が存するため、早くから様々な写本が紹介・言及されてきたが、版本も含めてその関係を整理したのが田邊勝哉氏である。田邊氏は①文亀二年(一五〇二)に三条西実隆によって増補され、さらにその後、飛鳥井雅庸によって書き継がれ

た写本と、②足利義尚の求めによる長享三年（一四八九）中御門宣胤増補進上本を吉田兼右が天文一〇年（一五四一）に洞院家本転写本により校合し小書を書き加えた写本がもとなっている古版本とがあることを指摘した（田邊²²）。

その後、宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題』歴史篇によって、書陵部所蔵本を中心によく写本系統の本格的な整理がなされた。同書の要点をまとめると、以下の如くである。

①現在伝存している皇胤系図類には大別していわゆる『帝王系図』と『紹運録』があるが、前者が人皇第一神武天皇から始まる単一皇胤系図であるのに対し、後者は天神天御中主命から始まり、また皇別氏の祖となった皇親の細注に「有^二子孫^一、見^二平氏^一」「有^二子孫^一、見^二源氏之内^一」等の注文があり、皇胤系図の他に皇別系の諸系図（源・平・橘・高階等）が付随していたと推測される。

②但し歴代天皇略伝の注文を『帝王系図』と『紹運録』で比較すると特別な相違は存しない。これは長い期間にわたって両者が互いに参照され合ったためと考えられる。

③『紹運録』は長い期間にわたって書き継ぎ加除訂正が施されたため、現存写本には異同が存する。これを大別すると、二系統に分けられる。第一類は内題に「本朝皇胤紹運録」とあって、国常立尊以下簡略に天神七代、ついで天照太神以下地神五代を注して神武天皇に続く。この系統には神別系氏祖の注記はないが、皇別諸氏祖の皇親の参照標注が詳細でその数が多い。第二類は巻首に「本朝皇胤紹運録」として異文の天地神の系図を注し第一類より詳しい神代系図を列記した後、「本朝帝皇系譜」と首題し、神武天皇以下の人皇へ続く。第一類がより『紹運録』本来の姿を伝えたものである。

④第一類には、葉室頼業書写・同頼孝書継本、実相院本、江戸初期写内閣文庫本（紅葉山文庫本）、花山院本、和学講談所本等がある。

第二類には江戸初期写壬生本、文明一六年甘露寺親長書写（以後の書継あり）本等があり、古版本もまた第二類系統である。

第一類と第二類という写本系統の分類は妥当なものであり、本稿でもこの分類を継承したいと考えている。ただ、甘露寺親長書写本を第二類と見做すことには問題がある。これは、第一類と第二類の分類を冒頭部分の記載の比較のみで済ませたことに由来すると思われる。また第一類を『紹運録』本来の姿を伝えたものと見る点も、結果としては正しいと考えるが、詳細な検討を経たものではない。これらは、書陵部所蔵本を中心に検討せざるを得なかったことによる限界と言えるであろう。

現在は、『紹運録』写本の中で重要な位置を占める東山御文庫収蔵の諸写本がマイクロフィルム等によって公開されるようになり、²³その他の機関に蔵される写本の情報も、『図書寮典籍解題』が執筆された時とは比べものにならないほど多く提供されるようになっていく。これら諸写本の調査を踏まえた上での検討が求められる。

三 諸写本の概要（一）第一類

前節までの検討を踏まえ、本節以降、諸写本の概要について紹介する。検討の対象とした写本は五七点である（別表参照）。『国書総目録』および『古典籍総合目録』に掲載される『紹運録』写本のうち、抜書本や『本朝皇胤紹運録略』、また後陽成天皇以降の系譜のみを掲載する写本は対象外とし、一方それ以外に管見に入った写本も含めた。²⁴

諸写本の系統分類については、まず『図書寮典籍解題』における第一類・第二類の分類を再定義し、さらに甘露寺親長書写本を独立させて第三類とすることにする。

『図書寮典籍解題』によれば、第一類は内題に「本朝皇胤紹運録」とあって、国常立尊以下簡略に天神七代、ついで天照太神以下地神五代を注して神武天皇に続く、とされている。これは先に述べた版本の系統でbに

は二種類に分けられるため、CとDとする（後述）。〔No 22〕
25〕

第一類E：大覚寺統の系譜を北朝天皇より前に記し、注記の異同が第一類AとDと比べて大きく、全体的に増補ないし改変がなされている。〔No 26〕29〕

まず三条西実隆の本奥書により書写過程が明瞭な第一類Bを見てみることにする。本文首題下に「飛鳥井殿雅庸筆」との貼紙があり、飛鳥井雅庸（一五六九～一六一五）の書写と伝えられている国立公文書館所蔵紅葉山文庫本〔No 11〕には以下の本奥書がある。

① 本云、
文亀^{（二年）}壬戌林鐘中旬、申^{（出禁裏御本）}西山内府^{（後小松院）}、
炎暑之病眼、終^{（書写功）}者也、不^{（可）}外見^{（矣）}、
権大納言藤判

この権大納言は三条西実隆であり、文亀二年（一五〇二）六月に、実隆が洞院満季自筆の禁裏本を借りて書写したものであるという。『実隆公記』にはこれに関連する記事が見える。すなわち、同月一五日条に「今日日本紹運図終^{（書写功）}」、二一日条に「帝王紹運録愚本終^{（書功）}了」、二三日条に「禁裏紹運録御本近代分依^{（仰書継之、所々僻字等同直進上之）}と見え、奥書の記述が裏づけられるとともに、この時の『紹運録』の書写が、後柏原天皇によって命じられたものであり、実隆はまず禁裏本を写した後、「近代分」を書き継ぎ、かつそれ以前の部分に存した誤りも正して進上したことが判明する。ただしNo 11は後陽成天皇を「太上天皇」、後水尾天皇を「今上」と記して掲載していることから明らかに、実隆書写本をそのまま転写したものではなく、さらにその後の書継が加わった写本を転写したものと考えられる。この点については、後土御門天皇までを記した後に大覚寺統の系譜を記し、その後後柏原天皇から正親町天皇までを記す東京大学史料編纂所所蔵徳大寺本〔No

17〕の方が原形をとどめていると言えよう。実隆は、後柏原天皇の一代前の天皇である後土御門天皇までを増補して進上したと考えられる。彰考館所蔵伊沢左馬助献上本〔No 19〕および国立公文書館所蔵坊城本〔No 20〕は、奥書①に続いて次の奥書を記している。

② 小書病眼狼藉之間、所々仰^{（公）}瑜禪師^{（令）}書之、
是又未練之書生不^{（可）}説也、早^{（可）}令^{（清）}書^{（而已）}、
如^{（右）}奥書判形迄相写、以^{（名）}譽御本写^{（也）}、
後人可^{（令）}秘藏^{（者）}也、

于時慶長拾四五月吉日

この奥書の内、前二行は実隆が記したものであり、後三行が慶長一四年（一六〇九）に記されたものということになる。

第一類Bの中ではNo 11が最も丁寧な写本であるように見受けられるが、例えば継体天皇の母親に関する記載がないのはNo 11（およびその転写本）以外の第一類B諸写本や第一類Aにあること、またNo 11でも継体天皇の前後の代の天皇には母親記載があることから推して、No 11の書写漏れと考えられ、必ずしもNo 11のみで事足りるというわけではない点、注意しておきたい。

次に第一類AとC Dについてであるが、両者には大覚寺統の系譜をどの位置に記すかという違いがある。どちらが『紹運録』の原形であったかは一見しただけでは判断できない〔中村〕が、

① No 17の記載順から見て、実隆が書写した段階では大覚寺統が末尾に記されていたと考えられること、

② 第一類Aと第一類C Dを比較すると、第一類Aに属するNo 1や東京大学史料編纂所所蔵徳大寺本No 4は、後小松天皇を「院」、称光天皇を「当今」、後柏原天皇を「今上」、後奈良天皇を「当今」と記すなど、『紹運録』成立当初の原形をとどめている可能性が高いと考えられること、の二点から見て、大覚寺統を末尾に記すのが本来の形であった、すなわ

別表1 『紹運録』写本一覧

No	所蔵機関・文庫等	函架番号等	形態	奥書等	末尾の配列	備考	分類
1	東山御文庫	勅封41-13	折本	ナシ	院「後小松院」—当今「称光院」—後花園院—後土御門院—今上「後柏原院」—当今「後奈良院」—正親町院—陽光院—後陽成院—上皇(後水尾)兄弟+大覚寺統	包紙「皇胤紹運録」(後西天皇宸筆) 「明暦」印	第1類A1
2	東山御文庫	勅封41-37	卷子	ナシ	当今(後奈良)—正親町院—陽光院+大覚寺統+後陽成院—上皇(後水尾)	正親町院・陽光院および後陽成院以降は靈元天皇書繼	第1類A2
3	宮内庁書陵部	257-322	冊子	ナシ	当今(後奈良)—正親町院—陽光院+大覚寺統+後陽成院—上皇(後水尾)	1954年東山御文庫本(Na2)を影写	
4	東京大学史料編纂所	徳大寺家本9-42-1	冊子	ナシ	院「後小松院」—当今「称光院」—今上「後柏原院」—当今「後奈良院」兄弟+大覚寺統	徳大寺家旧蔵	第1類A3
	旧彰考館		折本			大覚寺本 戦災で焼失 彰考館には他に類従本(3冊)・1冊本・1帖本も存在したが焼失	第1類A4カ
5	宮内庁書陵部	271-69	冊子	文化9奥書	上皇(後水尾)兄弟+大覚寺統	和学講談所本 大覚寺門主家本を転写した彰考館本を文化9年12月に転写	第1類A4
6	宮内庁書陵部	270-193	折本	明治18奥書+大正4奥書	上皇「後水尾」+同院皇子女～今上皇帝(中御門)皇子女+大覚寺統	1885年彰考館本(大覚寺門主所蔵本の転写)を転写+1915年持明院本を以て校合補写(後水尾～中御門)	
7	宮内庁書陵部	458-7	冊子	ナシ	後奈良院兄弟+大覚寺統	1884年5月実相院所蔵本を転写 A1～4より記事多し	第1類A5
8	東京大学史料編纂所	3075-2	冊子	ナシ	後奈良院兄弟+大覚寺統	1888年1月実相院所蔵本を影写 A1～4より記事多し	
9	無窮会専門図書館神習文庫	1604	冊子	ナシ	後奈良院兄弟+大覚寺統	1885年2月実相院本を転写 頼因識語によれば実相院本の紙背は寛永6年具注暦 Na15等と合綴	
10	宮内庁書陵部	葉2000	卷子	㉔(途中, ㉕㉖を引用)	当今「後奈良院」+大覚寺統+頼業奥書+頼孝奥書+正親町院～当今(東山)兄弟	葉室家旧蔵	第1類A6にBを朱書
11	国立公文書館	特60-14	折本	㉕	太上天皇(後陽成)—今上(後水尾)+大覚寺統	紅葉山文庫本 来歴志著録本 伝飛鳥井雅庸筆	第1類B1
12	宮内庁書陵部	458-9	冊子	㉕	太上天皇(後陽成)—今上(後水尾)+大覚寺統	明治写 Na11を転写 御系譜掛本	
13	東京大学史料編纂所	3075-62	冊子	㉕	太上天皇(後陽成)—今上(後水尾)+大覚寺統	Na11を影写	
14	国会図書館	850-31	冊子	㉕	太上天皇(後陽成)—今上(後水尾)+大覚寺統	多田賢意写 Na11を影写	
15	無窮会専門図書館神習文庫	1604	冊子	㉕	太上天皇(後陽成)—今上(後水尾)+大覚寺統	1885年3月Na11を転写 Na9等と合綴	
16	無窮会専門図書館神習文庫	13293	冊子	㉕(+文化9奥書)	太上天皇(後陽成)—今上(後水尾)+大覚寺統	玉籠73所収 1878年3月Na11を転写, 1879年2月稿本(和学講談所本)にて校合	
17	東京大学史料編纂所	徳大寺家本47-18	冊子	㉕	後土御門院+大覚寺統+後柏原院—後奈良院—正親町院	外題「本朝皇胤紹運図」 徳大寺家旧蔵 末尾に簡潔な天皇系図を付す(後陽成院の後, 2代空白にて代数のみ記す)	
18	国立公文書館	144-60	冊子	㉕	正親町院+大覚寺統	平氏・源氏・橘氏・藤原氏等系図・源氏物語系図を付す	第1類B2
19	彰考館	未5-8438	冊子	㉕+㉖	後陽成院+大覚寺統	伊沢左馬助献上	
20	国立公文書館	144-66	冊子	㉕+㉖	太上天皇(明正)—後光明院—後西院—仙洞「靈元」(「今上」を擦消)—当今(東山)—当今(中御門)皇子女	坊城俊広旧蔵	
21	茨城大学図書館菅文庫	7-2-418	冊子	㉕+㉖+文久2菅政友奥書	後陽成院—上皇(後水尾)+大覚寺統	彰考館本(Na19)を転写, 彰考館所蔵折本にて校訂	
22	東山御文庫	勅封67-4	卷子	ナシ	上皇(後水尾)兄弟	靈元天皇宸筆	第1類C
23	京都大学附属図書館	平松2門ホ1第1帖	折本	ナシ	正親町院兄弟	平松家旧蔵	
24	菊亭家(京都大学附属図書館寄託)	菊ホ13	冊子	ナシ(遊紙見返に「本朝皇胤紹運録略」により朱書校合の旨識語あり)	正親町院兄弟+(朱書)～後陽成院—覚深法親王	Na23と同内容に『本朝皇胤紹運録略』により朱書が加わる	第1類C+朱書
25	宮内庁書陵部	谷121	冊子	ナシ	今上皇帝(光格)	鷹司家・谷森善臣旧蔵 末尾に皇胤鑑を付す	第1類D
26	宮内庁書陵部	谷123	冊子	ナシ	仁孝天皇皇子女	花山院家厚写 谷森善臣旧蔵	第1類E
27	多和文庫	8函10	冊子	ナシ	太上天皇「光格天皇」—今上皇帝「仁孝天皇」—今上親王「今上皇帝」(孝明)皇子女	外題「皇胤紹運録」 貼紙・書入れ多し	
28	鹿児島大学玉里文庫	地5-2079	冊子	ナシ	今上天皇(孝明)(明正天皇以下は天皇のみ)	書入れ多し	
29	宮内庁書陵部	谷320	冊子	ナシ	正親町院	西洞院家・谷森善臣旧蔵 冒頭に月神以下神代系図および第2類系統の神代系図(三千院所蔵帝王系図の冒頭部に同じ)を付し, 末尾には親王家・大覚寺統の系図を付す 神武天皇以下は簡潔	第2類
30	天理大学附属天理図書館	吉21-36	冊子	㉕	今上「後奈良院」—今上「正親町院」兄弟	外題「本朝紹運図」カ 吉田兼右筆	
31	天理大学附属天理図書館	吉21-37	冊子	ナシ	後奈良院—今上(正親町)—陽光院～太上天皇(中御門)—今上(桜町)—桃園院—今上(後桜町)兄弟	外題「本朝紹運図」 正親町院まではNa30とほぼ同じ(室町末ないし至江戸初写), ついで吉田兼雄等補写	
32	宮内庁書陵部	458-8	冊子	ナシ	今上(正親町)—陽光院	御所本 吹上大本 外題靈元天皇宸筆	
33	無窮会専門図書館神習文庫	1554	冊子	ナシ	今上(正親町)—陽光院	1878年1月吹上官庫本(Na32)を転写 帝皇系図と合綴	
34	国立歴史民俗博物館	H-600-811第1冊	冊子	ナシ	今上「正親町院」—陽光院	有栖川宮家・高松宮旧蔵	
35	宮内庁書陵部	F10-75	冊子	㉕	今上「正親町」—陽光院—後陽成院—今上(後水尾)	壬生家旧蔵	
36	東京大学史料編纂所	徳大寺家本9-42-2	冊子	㉕	今上「正親町」—陽光院—後陽成院—今上(後水尾)	徳大寺家旧蔵	

No	所蔵機関・文庫等	函架番号等	形態	奥書等	末尾の配列	備考	分類
37	国立歴史民俗博物館	H-743-165	冊子	㊦	今上「正親町院」―陽光院―後陽成院―当院(後水尾)―今上(明正)兄弟(紹仁親王寛永20即位の注記あり)	花山院家・田中教忠旧蔵	第2類
38	東山御文庫	勅封41-16	冊子	㊦	今上「正親町院」―陽光院―後陽成院―今上(後水尾)	末尾に平氏・仁明光孝文徳源氏・橘氏系図を付す(兼右天文21・梵舜天正19奥書あり) 外題後西天皇宸筆 「明暦」印	
39	蓬左文庫	105-56(上帖)	折本	㊦	今上(後水尾)兄弟	尾張徳川家旧蔵 親王家・南朝の系図を付す 王代記・諸家系図と一具を成す	
40	下橋家資料(京都府立総合資料館寄託)	館古458-438	冊子	㊦	上皇(後水尾)―本院(明正)―後光明院―新院(後西)―今上皇帝(霊元)皇子女	外題「紹運録」 寛永20年仲夏如意日朝秀写、書継あり、下橋敬長補写 一条家旧蔵カ	
41	東山御文庫	勅封41-14-1	冊子	㊦	今上(明正)―紹仁親王(後光明)		
42	刈谷市中央図書館村上文庫	4035	冊子	ナシ	上皇「後水尾院」―本院「明正院」―後光明院―新院「後西院」―今上皇帝「霊元院」―今上皇「東山院」―長宮「今上帝」「中御門院」―皇子「今上」「桜町院」兄弟	村上忠順旧蔵 増補・書入れ多し	
43	宮内庁書陵部	458-10	冊子	ナシ	上皇「後水尾院」―本院「明正院」―後光明院―新院「後西院」―今上皇帝「霊元院」―今上皇「東山院」―長宮「今上帝」「中御門院」―皇子「今上」「桜町院」兄弟	1886年3月村上忠順本(Na42)を転写	
44	国立歴史民俗博物館	H-743-234	冊子	(貼紙)㊦+延享元奥書	桃園院―英仁(明和5御元服の注記あり)兄弟	玉松操・田中教忠旧蔵 菅原正次所蔵本を菅原正名が転写 明和5以降写カ	
45	早稲田大学図書館	平田44-2478-178	冊子	長享2奥書+文亀3・大永6奥書+延宝奥書	本院―後光明院―院(後西)―当今(霊元)―東宮「東山院」―東宮	外記平田家旧蔵	
46	京都文化博物館	3A-26	冊子	ナシ	今上(正親町)兄弟	双柏文庫旧蔵 「兼見云」の書入れあり	
47	宮内庁書陵部	谷321	冊子	ナシ	今上(正親町)―陽光院―後陽成院―上皇(後水尾)兄弟(正保元頃まで)	外題「帝皇系譜」 谷森善臣旧蔵 「兼見云」の書入れあり 小野毛人墓誌についての書入れあり	第3類A
48	宮内庁書陵部	270-194	冊子	ナシ	今上(正親町)―陽光院～今上(桜町)皇子女	御所本 吹上小本 吹上大本を簡略化し書き継いだものか	
49	神宮文庫	6門1292	冊子	ナシ	今上(後水尾)兄弟	御巫清直旧蔵 冒頭「神代系図」 末尾に親王家・南朝の系図を付す	
50	静嘉堂文庫	74函29架10991号	冊子	㊦+天正19梵舜奥書+天保奥書	後陽成院兄弟+後陽成～今上皇帝(光格)皇子女	黒川春村写(後陽成以降は別筆) 古版本を転写し増補したものか	
51	静嘉堂文庫	74函30架11011号	冊子	㊦+天正19梵舜奥書+嘉永2奥書	後陽成院兄弟	青木信寅写 古版本の内容を抄出改変したものか	
52	宮内庁書陵部	506-190	卷子	㊦	当今「後土御門」+後土御門院～正親町院+大覚寺統	甘露寺親長写、書継あり	第3類B
53	尊経閣文庫	5-14	卷子	㊦	当今「後土御門」+後土御門院～正親町院+大覚寺統	Na52の模写	
54	東京大学史料編纂所	3075-3	冊子	㊦	当今「後土御門」+後土御門院～正親町院+大覚寺統	1887年前田利嗣蔵書(Na53)を影写	
55	宮内庁書陵部	271-442	冊子	㊦	当今「後土御門」+後土御門院～正親町院+大覚寺統	明治模写	
56	無窮会専門図書館神習文庫	1626	冊子	㊦	当今「後土御門」+後土御門院～正親町院+大覚寺統	親長奥書本を転写	第3類B
	長谷場純教		卷子	㊦		長谷場本 現所在不明	
57	京都大学文学部	か6貴	卷子	㊦	当今「後土御門」―後柏原院―当今(後奈良)―方仁親王	外題「本朝紹運録」 1942年4月長谷場本を影写	第3類B

※奥書の記号は本文を参照。なお近代に転写した際の奥書はNa 6を除き奥書欄では省略した。

※「末尾の配列」欄の鉤括弧は傍書(多和文庫本は付箋)表記を意味する。丸括弧内は筆者による説明注。

別表2 脱稿後に追加調査した写本および未調査の写本

No	所蔵機関・文庫等	函架番号等	形態	奥書等	末尾の配列	備考	分類
①	筑波大学附属図書館中央図書館	ヨ220-1	冊子	寛政7奥書等	後土御門院+大覚寺統+後柏原院～後桜町院(「皇女」塗抹)―後桃園院―光格天皇(塗抹の上)―仁孝天皇(塗抹の上)―今上天皇(塗抹の上)皇子女	外題「皇胤紹運録」 速水三益写 「速水蔵書」印 他の第1類Aに比較し若干記事の増補・脱落あり また速水邦益・裕益による書入れ・増補あり	第1類A7
②	お茶の水図書館成實堂文庫		冊子	ナシ	後土御門院+大覚寺統+後柏原院～仙洞「後水尾院」―新院(明正)―後光明院―今上皇帝(後西)―太上天皇(霊元)―今上皇帝「東山院」―昭仁皇太子「今上」(桜町)	原表紙外題「紹運録」 江戸中期写(書継)「藤原実潔カ」「北氏家蔵」「押小路」「徳富氏珍蔵記」印 押小路家(三条西庶流)旧蔵 追記・朱書等多し 奥書は無いが内容は第1類B系統(Na11～21とは若干記事の異同あり) 書写の誤りやや目立つ	第1類B
③	大東急記念文庫	11函10架2017号	冊子	㊦	今上「正親町院」―陽光院―後陽成院―当院(後水尾)―今上(明正)―紹仁親王(後光明)兄弟	「葵園蔵書」印 寛永21頃写	第2類
④	菊亭家(京都大学附属図書館寄託)	菊シ55	冊子			外題「紹運録」 考安～仲哀兄弟までの残欠 第1類C・第2類に似るがどちらとも若干の異同あり	第2類カ
⑤	京都大学附属図書館	5-64-ホ6	冊子	㊦(中途まで)	後土御門院+大覚寺統+後柏原院―後奈良院―正親町院	末尾に簡潔な天皇系図を付す(中御門?を今上皇帝とする) 祖本はNa17系統写本か	第1類B1
⑥	東海大学附属図書館桃園文庫	桃34-37	冊子	ナシ	上皇(後水尾)―本院(明正)―後光明院―新院(後西)―今上(霊元)皇女	池田亀鑑旧蔵 寛文10頃写 後花園を後小松の子と記さない等、他の第2類とは異同あり 傍書の内容も異なる 末尾に簡略な皇系統図を付す	第2類
⑦	大阪天満宮文庫	91-1	冊子			近世初期写 河内屋和助万延元年奉納本	未調査

※『国書総目録』掲載の大橋図書館本は関東大震災にて焼失。

『国書総目録』は他に国会図書館所蔵として卷子本1巻を記すが、同館の目録では所蔵を確認できない。

ち第一類C Dのように大覚寺統を前に繰り込むのは『紹運録』成立後の改変であると考えておきたい。この点は内容上の検討からも裏づけられる。例えば第一類AおよびBでは神武天皇に関する注記が前掲のようであるのに対し、第一類Cに属する東山御文庫勅封六七―四〔No.22〕では、次のように記されている。

諱神日本磐余彦天皇、亦云彦火々出見、少年時号「狭野尊」、
地神第五代彦波瀲武鸕鷀草不尊合尊第四皇子也、

不尊合尊治天下中八十三万五千九百九十二年庚午正月朔日降誕、天皇生而明達
意確知也、

甲申年十五歳立、

甲寅年四十五歳謂「諸兄及子等」曰、自「天祖降跡」以逮「于今」一百七十九万二千
四百七十余歳、而遼邈之地、猶未「霑」於玉沢「云々」、是歳帥「諸皇子」東征、
四十九歳戊午歳秋九月甲子朔戊辰、始敬「祭天神地祇」、

辛酉年春正月庚辰朔、天皇即「帝位於橿原宮」、是歳為「天皇元年」、于時御年五十二、
尊「正妃媛踏鞬五十鈴媛命」立為「皇后」、則大三輪神女也、故古語稱之曰、於「
畝傍之橿原」也、太「立宮」柱於底磐之根、峻「峙」風於高天之原、而始馭天
下之天皇、号「神日本磐余彦火々出見天皇」焉、

即位七十有六年春三月甲午朔甲辰、天皇崩「于橿原宮」、年一百廿七歳也、

明年秋九月乙卯朔丙寅、葬「傍山東北陵」、
(以上、右傍書)⁽²⁸⁾

母曰「玉依姫命」、即天皇之姨也、

在位七十六年
(以上、左傍書)

一見して、第一類A Bとは異なり、『日本書紀』によって記事が増補されていることが明らかである。また神武天皇の皇子についても、第一類A Bは綏靖天皇の他、神八井耳命と手研耳命を記すのみであるのに対し、第一類Cは他に岐須美々命・彦八井耳命も記すという違いがある。

平安時代前期の皇子女についても、例えば第一類A Bでは桓武天皇

の皇子女一七人を記した後、「此外男女皇子十九人略之、已上卅六人也」、嵯峨天皇皇子女二六人を記した後、「此外男女廿四人略之、已上五十人也」として全皇子女を記しているわけではないのに対し、第一類Cではそれぞれ三六人、五〇人全員を記しているという違いがある。これに対し、No.25は大覚寺統系譜の位置を除けばいずれの点も第一類A Bの内容に近いものとなっており、第一類Aの亜種とも呼ぶべきものである。今、これを第一類Dとする。

第一類Aに属する写本には、先述した他に、後奈良院を「当今」とし、その後、霊元天皇が書き継いだ東山御文庫勅封四一―三七〔No.2〕、大覚寺門主家藏本（現所在不明）を転写した彰考館本（戦災で焼失）をさらに転写した写本〔No.56〕、実相院所藏本を転写した写本〔No.79〕などが存在する。この内、No.2はNo.1と比較すると、後小松・称光・後柏原天皇をそれぞれ追号にて記すという点において改変が加わっているが、霊元天皇による書継部分を除く書写時期は後奈良天皇在世中の可能性が考えられ〔中村〕、内容的にもNo.1とほぼ同一であり、同写本の誤脱等を正すことができる重要な写本である。これに対しNo.1と共に古形を残しているNo.4はNo.12に比較して記事が若干詳しくなっている箇所があり、記事が増補されている。ただし一方でNo.12はNo.56を除いた他の第一類A B写本に見えない後小松天皇第二皇子（小川宮）が記載されており、必ずしもNo.12がすべて最も古い形を伝えているとは言えない。

大覚寺門主家藏本転写本の系統には、No.56があるが、それらの写本の本奥書によれば、大覚寺門主家藏本は「慶長上皇」が秘するところのものであったという。この「慶長上皇」は後陽成天皇を指すとされている〔小野〕⁽³³⁾が、その次の後水尾天皇を「上皇」と記していることからすれば、本文にその後の追補がなされているということになる。しかし後水尾天皇は慶長一六年（一六一一）に践祚しており、あるいは「慶長

上皇」は後陽成天皇ではなく、後水尾天皇を指すという可能性も考えられるであろう。No 56の内容はA1とほとんど同じであり、ただ『諸門跡譜』により後伏見天皇皇子寛胤法親王に関する書入れや後水尾天皇皇子に関する記事が付加されている点が異なる程度である。

後奈良院までを掲載する実相院本は、井上頼圀氏によれば寛永六年具注暦を紙背に用いたものであるという⁽³⁴⁾。ただし内容的には『日本書紀』等による記事の増補が見られるなど、上述した第一類A Bの諸写本に比べれば、『紹運録』当初の姿からは遠ざかっている。

宮内庁書陵部所蔵葉室本（No 10）には、以下の奥書がある。

©我眞宗編伝^(偏カ)大日覚王之滴々、不

謂^レ祖宗親族之綿々、豈四河入海同^二一^一釈氏^一者乎、然釈迦如来出^二

浄飯之家^一、阿難尊者生^二斛飯之

室^一、世以称^レ之、人以貴^レ之、爰家門懋

有^レ留^二大王数代之佳名^一、争不^レ知^二

帝皇万世之系譜^一乎、仍紹運^一図一卷^(禁裏御本、東山左府筆)、手自書写之、庶幾

末葉不^レ墜^二其緒^一、祝々、

二品（花押写）親王

此一卷令^二書写^一了、字誤

重而可^二吟味^一者也、

頼業（花押）

〔朱書〕今校合之本者、坊城一位俊広卿本也、其奥書云、

（○中略 奥書a⑤bあり）

一校訖、不^レ宜字有^レ猶、重而可^レ正^レ諸者也、

元禄六曆三月上旬

頼孝（花押）

〔別筆朱書〕「從^二正親町院^一増補之、」

すなわち二品親王（貞敦親王⁽³⁵⁾カ）が書写した後奈良天皇を「当今」とする『紹運録』⁽³⁶⁾を葉室頼業（一二一五～一六七五）が転写せしめ、その後、元禄六年（一六九三）三月に頼業の男頼孝（一二四四～一七〇九）が坊城俊広所蔵本（＝現国立公文書館所蔵坊城本No 20）によって校合、さらに正親町天皇以後東山天皇の代までを継いだということが判明する。この二品親王書写の『紹運録』は東山左府（洞院実熙 一四〇九～？）の筆の禁裏本を書写したものであったというが、満季の男実熙の没年は不明であるものの一五世紀の人物であるから、後柏原天皇・後奈良天皇の記事は（二品親王自身が書き足したのでない限り）実熙より後の人物が追補したものであるということになる。なお、二品親王書写の『紹運録』は、内容上、第一類Aに該当する。

別表には以上に述べたことをもとにAを1～6に、Bを1と2に細分してグループ分けを示した⁽³⁷⁾。

ところで第一類AとBを比較すると、幾つかの相違点がある。

①順徳天皇皇子善統親王の子孫について、第一類Aは記さないが、第一類Bは記す⁽³⁸⁾。

②後花園天皇や後土御門天皇に関する記述が第一類Bの方が詳しい。

①の相違点は、恐らくは実隆が書写した際に追補したものと考えられ、②については、AとBそれぞれ別個に追補されたことを意味すると思われる。このように見てみると、第一類Bが底本とした「満季公筆」本と第一類Aの中のNo 11が底本とした「二品親王」本の親本である「東山左府筆」本は、末尾部分についてはともかくも、ほぼ同内容であったと考えることができるであろう。ちなみにこれらの点について第一類C 1

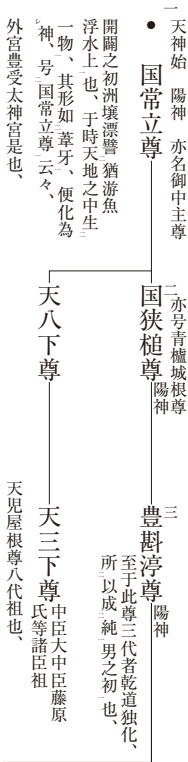
を比較すると、①についてはB以上に詳しく記載されており、②は逆にAとほぼ同内容の記述となっている。

最後に第一類Eについて述べておくと、これらは第一類D系統の写本にさらに大幅な増補もしくは省略等の改変が加わった形の写本である。本来ならば、どのような過程を経て改変がなされたのかさらに検討すべきであるが、本稿では原形に迫ることを主目標としているため、それ以上の検討は控えることにする。

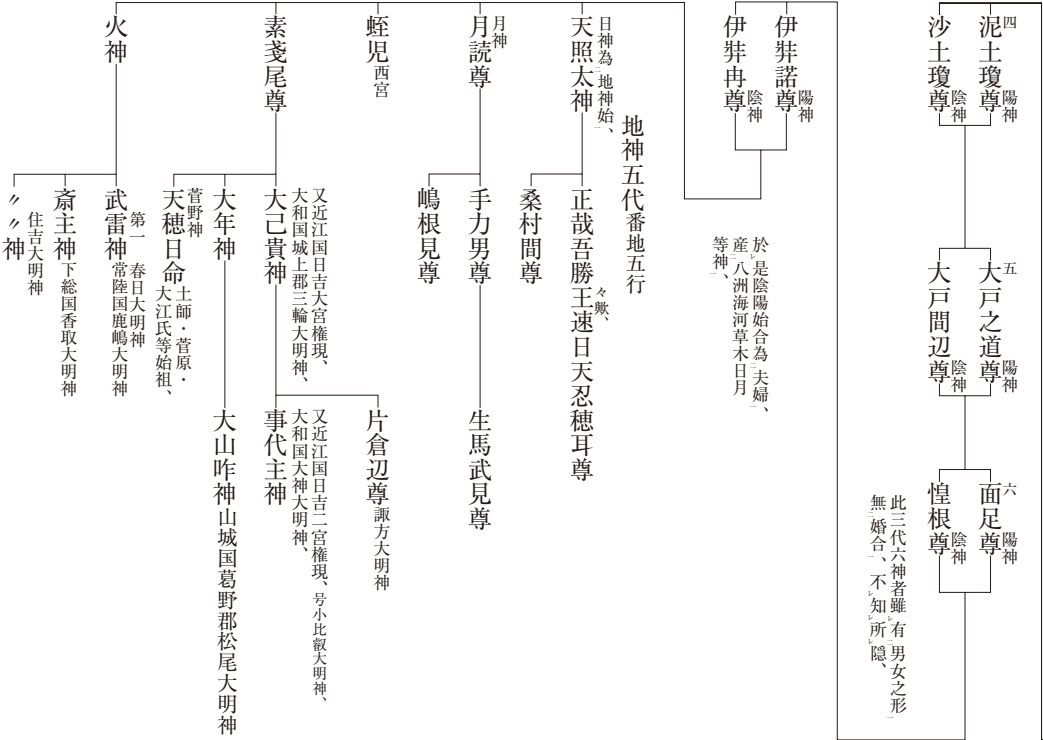
四 諸写本の概要(一)第二類・第三類

本節では第二類および第三類の写本について紹介・検討する。第二類は『図書寮典籍解題』では、巻首に「本朝皇胤紹運録」として異文の天地神の系図を注し、第一類より詳しい神代系図を列記した次に「本朝帝皇系譜」と首題し、神武天皇以下に続くという特徴を持つ、とされている。これが版本aの系統であり、さらに群書類従本に受け継がれているが、群書類従本では冒頭部分が整理され、一部省略されているため、この特徴がわかりづらくなっている。そこで天理大学附属天理図書館所蔵吉田兼右筆本(Na30)によって、冒頭部分を示すことにする(ただし傍訓等一部は省略する)。

● 本朝皇胤紹運録
天神七代象天七星



(○改丁、次丁ウラより以下の記事が始まる)

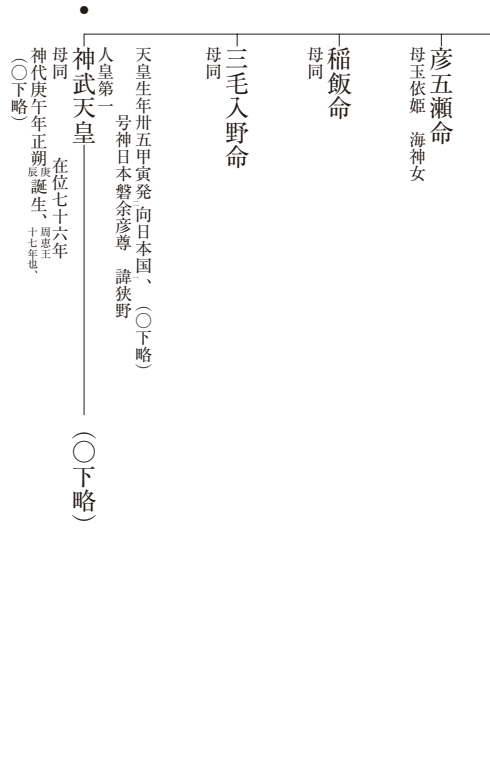


本朝帝皇系譜

天神第一 ● 国常立尊 第一 国狭槌尊 第二 豊斟淳尊 第四陽神 泥土瓊尊 同陰神 沙土瓊尊 第五陽神 大戸之道尊 同陰神 大戸間辺尊 第六陽神 面足尊 同陰神 惶根尊	開闢之初、天地之中有一物、 狀如「葦牙」、便化為神、
	已上三神乾道獨化、所以成此純男之神、 一本云、已上三代、天地闢始之空中狀如「葦牙」、即為神、是世始也、
地神第一 ● 天照太神 母伊弉冉尊 同陰神 月読尊	諱日神
第七 陽神 伊弉諾尊 同陰神 伊弉冉尊	
沫名杵尊	
天万尊	
天鏡尊	

素戔鳴尊出雲大社神是也、

天神第二 ● 天照太神与素戔雄尊、化生給、天照太神与此尊於住天宮給之ト 不下此国、治天下九万四千三百年也、 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 天穗日命出雲臣・土師連等祖 天津彦根命凡河内直・山代直等祖 活津彦根命 熊野櫟樟日命	
第三 天津彦々火瓊々杵尊 母片幡千々姬 高皇彦靈尊皇女也、 初天降於日向龍和之高千柵空云々、 治天下三十一万八千五百四十二年、 葬筑紫日向可愛山陵、	
火闌降命隼人等始祖 母木花之開耶姬 大山神祇女也、	
第四 彦火々出見尊 通龍宮得兩顆珠、 治天下六十三万七千八百九十三年 葬日向高屋山陵、	
火明命尾張連等祖 母同	
第五 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 母豊玉姬 海童二女也、 治天下八十三万六千四十二年、 葬日向吾平山陵、	
小田達尊 小嶋達尊 小栗田命 津守田命津守氏祖也、	



続いて奥書を示す。

④右、帝皇系譜自「室町殿」被書之時中書也、但

小書等以「他本」書之、未終「書写之功」、

時長享二曆季冬清書、翌年季春中旬

進之、 亜相藤原宣胤

天文八年十二月十九日遂「書写之功」訖、 (兼石花押)

〔天文十年四月十五日以「洞院殿御本不違」二字令「書写」之本、校合了、小書又書

加丁、〕

これによれば、この写本は元々、長享二年（一四八八）より三年にかけて室町殿（足利義熙）の仰せにより中御門宣胤（二四四二）一五二五が書写進上した写本の中書本であるが、小書は他の写本より書き入れている。それをさらに天文八年（一五三九）に吉田兼右が転写し、さらに天文一〇年に洞院家本をそっくり転写した写本によって校合、書

入れを加えたのが吉田兼右本である。「洞院家本」は恐らく第一類Aであろうから、第二類は基本的に中御門宣胤書写本であると言って良い。すなわち宣胤書写あるいはそれ以前の段階において第二類の系統が成立したのである。第二類では他に天理大学附属天理図書館所蔵吉田兼雄補写本〔No.31〕が奥書を持たないものの正親町院まではNo.30とほぼ同内容の善写本である。その他、増補改変の甚だしい写本も存在するが、本稿ではこれ以上の検討は控えることにしたい。

次に第三類について述べることにする。これはいずれも甘露寺親長書

写本の系統で、宮内庁書陵部所蔵甘露寺親長自筆本〔No.52〕の奥書には、

⑤文明十六年六月

十六日終「書写之功」、

以「中院一品通秀・左大史

雅久宿禰等本」引合、

彼は書之、 按察使藤原親長

とあり、文明一六年（一四八四）に親長が書写したものであるが、その後、別の筆者によって正親町天皇まで書き継がれている。詳細な朱筆追

記が各所に見られるが、「親長筆と書継ぎの筆者との校異とが混して、

明瞭でない」（宮内庁書陵部二〇七頁）。一方、京都大学文学部には延徳

二年（一四九〇）に親長が再び書写した写本の影写本が存在しており〔No

57〕同本には次の奥書が記されている。

⑥ 村田肥前守所望

延徳二年五月九日

終「書写之功」畢、

按察使（親長花押写）

〔前大納言親長法名蓮空 甘露寺按察使殿〕

前義庵和尚為「遺物」從「舍弟村田寿信」贈給候、

享禄元

藤原越前守長谷場慶純（花押写）

この二つの系統の親長書写本を見比べると、すべてではないものの、No.52に見える朱書追記の多くはNo.57には存在しない。したがってこのNo.57を参照することにより、No.52の朱書追記の大部分が延徳二年以降のものであり、逆にNo.57に存在する追記は延徳二年以前になされたものであることが明らかとなる。

今、このNo.57により冒頭部分を第二類と比較してみると、冒頭部分から地神五代火神まではそれほど大きな異同が見られないが、第二類の「本朝帝皇系譜」以降に相当する部分には大きな違いが見られる。そこでその部分をここに示して見ることにする（ただし傍訓は省略）。

地神始

一 諱日神 伊弉諾尊長子
●天照太神 伊弉冉尊

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊
天照太神与素戔雄尊化生給、天照太神于此尊於住天宮給シト
不下此国、治天下七十九万四千三百年也、

三 天津彦々火瓊々杵尊
正哉吾勝々速日天忍耳尊太子、
母栲幡千千姫彦靈尊女也、
初天降於日向襲之高千穂峯矣、
治天下三十一万八千五百四十二年也、

火闌降命
母鹿葦姫

四 彦火々出見尊
火明命尾張氏祖
母同火闌降尊、

五 彦波瀲武鸕鷀草造不合尊
彦火々出見尊太子、母日豊玉姫、海童二女也、
治天下八十三万六千四十二年也、

彦五瀬命

稻飯命

三毛入野命

諱狹野命
神武天皇人皇始

小田達尊——小嶋達尊——小栗田命——津守田命（津守氏祖也、）

●人皇

戊午年九月始而祭諸神置祭主、
第一 治七十六年

人皇始帝 諱狹野
●神武天皇

母玉依姫（海童女、皇純也、）
神代庚午年正朔辰誕生、（○下略）

（○下略）

このように、第三類は第二類と近い記載内容を持っており、一見、第二類から派生した写本のようにも思えるが、神武天皇以下は第二類より簡潔であり、その後の朱筆追記によって第二類の記述が補われていること、また宣胤の書写よりも親長の書写の方が先であることなどを考えても、第三類を単純に第二類の中に含めることはできない。

この点につき、第一類Cと第二類・第三類の記事を比較することによってさらに考えてみたい。一般的に見ると、第一類Cよりも第二類の方が系図中に記される人名は詳しくなっているが、先に触れた平安前期の皇子女の記載については同内容となっている。したがって両者は同じ系統の史料によって増補したと見て良い。一方、第三類は第二類より簡潔であるのみならず第一類Cの記載とも出入りがあり、平安前期の皇子女についても必ずしも全員は記さずさらに記載配列が異なるという相違点が見られる。したがって第三類は第一類Cや第二類とは別の史料によつて増補したものであるということになる。甘露寺親長が中院通秀本や小槻雅久本と引き合わせて第三類『紹運録』を作成したことが奥書に見えるが、それらの写本は第一類C・第二類増補に用いられた史料とは別内容であったのである。この点に関して『親長卿記』文明三年三月

二日条に、「及^(綱)晚自^(綱)広橋大納言許可^(綱)參^(綱)殿上^(綱)下^(綱)姿、之由示之、即馳參、自^(足利義政)室町殿^(足利義政)紹運録被^(足利義政)御覽^(足利義政)書様端一枚可^(足利義政)書進^(足利義政)云々、一枚書之、予・滋野井前宰相中将・雅久晴富宿禰両三人各一枚被^(マヤ)書之、」三日条に、「昨日仰紹運録雅久書之由物語、」との記事が見え、この当時、既に『紹運録』の写本には幾つかの系統があったことがうかがえる。また『十輪院内府記』文明一六年六月二七日条に、「晴、々御会女房歌、臣下之次為^(綱)御製^(綱)之上所見、注^(綱)遣甘露寺^(綱)、又被^(綱)返^(綱)送帝王系図、」と見えるのは、まさしく親長による第三類『紹運録』作成に関連する記事であろう。

なお、先に翻刻した天照大神以下の地神系図部分は三千院所蔵『帝王系図』のそれとよく似ており、神武天皇以下の部分についても同一ではないものの比較的似通った内容となっている。直接的関係は想定することができないものの、祖本段階における関係を想定できるかも知れない。

むすび

以上、『紹運録』の諸写本について検討を加えてきた。要約すれば、諸写本の中では第一類A Bが最も『紹運録』当初の形を伝えており、なかでも第一類A 12がおおよそ最も古い形を残している。ただしそれらにも誤脱や増補があるため、第一類A 3・6および第一類B 12の諸写本も含めて検討する必要がある、ということになる。今後はまずこれらの写本の記載を詳細に検討、校訂して『紹運録』当初の姿を復原する作業が必要となる。

第一類A Bが当初の姿を伝えているとすると、問題となるのが平安前期の皇子女の省略である。第一類A Bでは桓武天皇皇子女一九人、嵯峨天皇皇子女二四人、文徳天皇皇子一四人、光孝天皇皇子二一人が省略されているが、第一類Cおよび第二類ではこれらがすべて補われている。何故このようなことが起こるのか、それを考える上で参考になるのが第一類A Bによく見える「子孫見^(綱)源氏」「子孫見^(綱)平氏」等の注記である。

これらの注記は菅政友以来、『尊卑分脈』と関連づけられて考えられることが多く、『紹運録』は『尊卑分脈』の現在欠けている巻一・二に相当するのではないかとする説があり、またそれとは別に、『紹運録』には皇胤系図の他に皇別系の諸系図が付随していたとの推測もある(宮内庁書陵部)。しかしそうではなく、『尊卑分脈』に存在した帝王系図⁽⁴²⁾をもとにして『紹運録』が作成されたのであり、作成の過程において『尊卑分脈』帝王系図に存在していた皇子女の記載が一部省略されることがあったと考えてみてはいかがであらうか。『薩戒記』応永三三年五月一四日条に「御系図自^(綱)往古^(綱)不^(綱)一^(綱)決^(綱)事等多之、今度可^(綱)被^(綱)決^(綱)之也」と見えるように、『紹運録』作成目的の一つには従来決していなかった皇統系譜の諸問題に決着をつけるということがあったのであり、必ずしも皇胤すべてを網羅することは求められていなかったのである。

このように考えた場合、更なる問題として以下の二点を検討する必要がある。第一点は、『紹運録』のもとになった『尊卑分脈』所収帝王系図とはどのようなものであったのか、またどのような史料に基づいて作成されたのか、という点である。これについてはまずは『紹運録』の原形を確定した上でさらに検討を進める必要があるが、歌人についての注記等、系図に本来存在しなかったであろう記述がまま見られる点は留意しておかなければならない。

第二点は、『紹運録』写本の増補過程をどのように位置づけるのかという問題である。第一類から第二類への増補は、場合によっては、『尊卑分脈』所収帝王系図への回帰といったことも想定される可能性があることになるが、冒頭部分の重複的な記事の存在から見ても、第二類が『紹運録』とは別系統の皇室系図によって増補されたものであることは疑いないし、『尊卑分脈』所収帝王系図がどのようなものであったかを探る手がかりもほとんど無いので、実際問題としては増補過程を検討することが先決となる。そのためには、『紹運録』以外の皇室系図古写本

を調査検討していかなければならないが、本稿ではそこまで手を広げることができないので、幾つか気のついた点のみ指摘しておくことにしたい。

尊経閣文庫所蔵の『帝王系図』（五―七書）は『統群書類従』巻一〇六所収『皇胤系図』の祖本で鎌倉荘厳院旧蔵であり、神武天皇より後二条天皇に至る系図で伏見天皇の時に成立し、以後書き継がれたと考えられるものである（菊地、飯田b）。同書は各人物についての記事は簡潔であるが、記載人員の数は大体において第一類A Bより詳しく、第一類C 1に近い。詳細な検討は今後の課題であるものの、人名については、第一類AもしくはB系統の写本に尊経閣文庫所蔵『帝王系図』系統の史料および『尊卑分脈』所収源氏系図の情報を追加したものが、第一類C 1に当たると考えて良さそうである。

次に、宮内庁書陵部所蔵『帝王系図』（四五八―一二）、東山御文庫収蔵『帝王系図』（勅封四―一七）、京都大学附属図書館寄託菊亭本『帝王系図』（菊テ一）について触れておく。これらはいずれも「人皇第一」として神武天皇に始まる同系統の写本であり、書陵部本は「明暦」印を持つ後西天皇手沢本、東山御文庫本は中院大納言本を転写した霊元天皇等宸筆本、菊亭本は元禄頃書写である。室町中期頃に成立し、以後追補がなされたと想定されている（宮内庁書陵部二〇二頁）が、記載内容は人名・記事共に第二類に極めて近く同一と言っても良いぐらいである。⁽⁴⁴⁾これらの写本の祖本と第二類系統誕生との先後関係も、今後の検討課題である。

この他の皇室系図古写本には、先に触れた三千院所蔵『帝王系図』の他、東京大学史料編纂所所蔵『本朝帝系抄』（S〇〇七五―一二）、尊経閣文庫所蔵『帝皇系図』（五―九書）、国立歴史民俗博物館所蔵『帝系図』（H―七四三―四五三、醍醐寺三宝院・田中教忠旧蔵）などがあり、東山御文庫勅封六七―一六一『二代要記』中の記載にも皇室系図が含ま

れている。これらも含めてさらに検討していくことが必要であろう。

以上、忽卒の間にまとめたため、未調査の写本も残り、いまだ十分な検討をなし得ていないが、今後、本稿によって立てた見通しをもとに、さらに詳細な調査検討を行い、『紹運録』の当初の姿、その増補の過程、他の皇室系図との関係等について、明らかにしていきたいと考える。南北朝・室町期の洞院家においては『尊卑分脈』や『紹運録』のみならず、『拾芥抄』『皇代暦』『歴代至要抄』『皇代略記』『魚魯愚抄』『伝宣草』『行類抄』『蛙抄』『名目鈔』等、数多くの書物が作成され、また『洞院家部類』に代表される有数の蔵書が保有されていた。こうした洞院家における知の体系を考える上でも、『紹運録』の分析は役立つものと思われる。

註

- (1) 利用上の便宜から、特に系図に追補書継がなされることが多かったことについては、飯田a論文等に指摘されている。
- (2) 『新校群書類従』は一九七七年から翌年にかけて、名著普及会より覆刻刊行されている。
- (3) 筆者所持の訂正三版第七刷（一九九一年二月一五日発行）では初版について、「昭和七年十月十五日発行」と記され、一九三二年刊行とされているが、その理由は不明である。
- (4) これ以前、群書類従出版所による『群書類従』の刊行がなされたという（長）が、『紹運録』が刊行されたかどうかは定かでない。
- (5) この他、頭注と本文との対応関係がわかりにくい場合には、イロハや▲等の記号を用いたりもしている。
- (6) 『群書類従』版本における記述（活字本にも翻刻される）。
- (7) 版本の頭注が主に校訂注であったのに対し、Cで新たに付加された頭注は、例えば「髪置」（二〇六頁）など、語句や人名の説明注が目立つ。
- (8) 川俣馨一については今井ab論文参照。
- (9) 太田藤四郎については、太田論文参照。
- (10) 第五冊の末尾には、初版・再版本では松林竹雄・知念武雄・小林正直の三名が校正者として挙げられているが、三版本ではさらに甲田利雄・石井英雄・高橋正

治の三名が加えられている。

- (11) 井出a論文によれば、他に「太平洋社版と称するもの」もあるとのことであるが、やはりEを踏襲したものであるという。ちなみにEの印刷所が太平洋社である。

- (12) これに関連するかどうか不明であるが、『舜旧記』慶長一七年(一六一二)二月二五日条には「次豊寿方へ筆功料三斗持遣也、紹雲系図一札也、翌一八年五月九日条には「江戸將軍様へ御礼、予杉原三束・紹運系図一冊進上也」との記事が見える。

- (13) ただし正しくは正月二三日即位であるが、「二廿三即位」と誤る。

- (14) 皇子女は「本朝皇胤紹運録」より詳しく、aに近いが、天皇名を光仁天皇を除いて和風諡号で記し(漢風諡号を注記)、各天皇ごとの注記的記載はごく簡潔なものとなっている等の相違点がある。

- (15) dの序による。

- (16) 中山信名「温故堂瑞先生伝」(文政二年(一八一九)九月記。『群書類従正統分類総目録・文献年表』統群書類従完成会 一九七九年 初版一九三〇年、所収)によれば『群書類従』の刊行が完了したのは文政二年である。東京大学史料編纂所所蔵『群書類従』版本(一〇〇一―一五三)巻六〇上中下冊には、尾題の下もしくは左に「文化十三年二月十五日蒔田権佐藤原定邦奉納」との奥書があり、それによれば文化一三年(一八一六)以前に刊行されたということになる。

- (17) 静嘉堂文庫所蔵『和学講談所蔵書目録』(一五〇一―一七二〇七三)にも「紹運録」一巻 後陽成院御本」と見える(朝倉治彦監修『和学講談所蔵書目録』一ゆまに書房 二〇〇〇年、七九頁)。

- (18) 「歟」の字について紅葉山文庫本系統(後掲別表No11~16)以外の第一類B系統写本(No17~21⑤)は「云々」「云云」に作る。どちらが本来の文字であったかは不明。

- (19) それ以前は、中御門宣胤が編纂したとの説(長沢、伴等)や満季は「古く来レル紹運録」南朝御系ヲ新作補入」したとの説があった(谷森六八~六九頁)。

- (20) 村田正志氏は『紹運録』で後小松天皇の下にその猶子後花園天皇が実子のごとく掛けられていることから、「後小松天皇の思召なり御遺詔なりが、その近臣によつて強く指示せられてゐた間の記載であらう」と述べられてもいる(村田b三六六頁。村田aも参照)が、村田氏自身が記されているように「紹運録」における後花園天皇に関する記載は応永三三年以降のことと考えられるから、「後小松院が公的に後光厳院流を正統とする系図作成を行った」(松蘭一八頁)というところまでにとどめておくべきであろう。

- (21) なお、応永一三(一四〇六)~一九年頃書写され、その後、永禄六年(一五六三)頃まで書き継がれた皇室系図(厚谷)である東京大学史料編纂所所蔵『本朝帝系抄』(S〇〇七五―一)に、正哉吾勝々速日天忍穂耳尊の傍書として

て「紹運録云、素戔嗚尊皇子云々」と記されている。

- (22) これ以前は、②は「紹運録」とは別書とする見解(菅、谷森六八頁)がある一方、両者を「紹運録」と見做す見解(八代)も写本系統の問題にまで踏み込んで論じられることはなかった。

- (23) 『書陵部紀要』五(一九五五年)・四七(一九九六年)・六一号(二〇一〇年)の彙報欄に掲載(なお、五九号(二〇〇八年)に掲載される勅封一〇五―一三七の「紹運録」は後陽成天皇から桜町天皇兄弟までの内容であり、本稿では検討対象外とする。また六一号掲載の内、勅封四一―一五「本朝皇胤紹運録」も正親町天皇から桜町天皇までの内容である。また「皇室の至宝 東山御文庫御物」一において勅封四一―一三七(No2)の紹介がなされた(中村)。

- (24) 「本朝皇胤紹運録略」は「紹運録」を改変した写本であり、「紹運録」の写本系統を考える上ではそれなりの意味を持つが、「紹運録」の原形を探る上ではあまり参考にならないため、除外することとした(第一類B系統より派生した写本かと思われるが、詳細は今後の調査に委ねたい)。また東京国立博物館所蔵「参訂紹運録」(QB三一九八)は丸山可澄が「紹運録」の他、六国史や「古事記」「新撰姓氏録」等の諸書を参考にして作成した神武天皇から淳和天皇皇子女までの系図であるため、これも除いた(可澄が参考にした「紹運録」は以下に述べる第二類系統の写本らしく思われる。東京国立博物館所蔵本は可澄自筆で徳川宗敬氏旧蔵)。なお、調査にあたっては、No.61921272842など紙焼写真やマイクロフィルム、またネット上の画像閲覧にとどめた写本もある。

- (25) No2等はこの位置に「諱狭野」三字あり。恐らくはNo1の誤脱か。

- (26) 「後小松院宸筆歟」の「歟」について写本間に異なることは、註(18)で触れた。

- (27) なお、後柏原院・後奈良院の箇所には擦消痕が認められるので、書写後に書き換えられた可能性もある。また「実隆公記」永正六年(一五〇九)四月三日・一日、五月一日・二二~二四日条に実隆の「紹運録」書写に関する記事が見え、また享禄四年(一五三二)閏五月二〇日条には、「紹運録近代分可書入」之由昨日被「仰下、老眼雖難治、馳筆、以「朱鉤事」召「経師之弟子、召「置前」令「鉤之、則進上了」との記事がある。これらが当写本の書写に関わっている可能性も考えられる。

- (28) 右傍書の原文は左行から始まり右行へ進む順序で記されているが、本稿では便宜、左右を逆転させて翻刻した。

- (29) 実相院本を転写したというNo789はこの他に「研耳命」を記す。

- (30) 註(25)の他にも、例えばNo1は天武天皇皇子長親王の男である大市(文室大市)を長親王皇子栗栖王の男に誤っている。

- (31) 例えば神武天皇については「檀原宮」「葬」畝傍山東北陵」の記述が増加して

いる。

(32) この小川宮の記事について、No.1は紙を継いで補入している。

(33) そもそも先述したように、和学講談所本は「後陽成院御本」「後陽成帝御本」と呼称されていた。

(34) No.9識語。なお実相院本の現所在は未確認。

(35) 貞敦親王は永正一八年（一五二二）四月二七日に二品に叙され（東山御文庫勅封四一—二〇『女叙位聞書』）、天文一四年（一五四五）四月二七日に落飾している（言継卿記）。

(36) この他、二品親王が書写した後に別人が補写もしくは転写追補した写本を頼業が再転写した可能性も考えられるが、今は一応、本文のように考えておくことにしたい。

(37) なお、宝永四年（一七〇七）の禁裏文庫の蔵書目録である菊亭本『禁裏御記目録』（京都大学附属図書館寄託、菊キ三三）（田島論文参照）には、「紹運録^{不足}」^{書三}と見出し、^{書三}「巻」との記述が見えるが、現在これに該当する「紹運録」写本は見出せない。あるいは東山御文庫勅封四一—三四「神代系図」を指すのではないかと思われるが、同史料は本来の書名は不明であるものの現存の他の「紹運録」写本とは内容が異なっている（小倉解説参照）。

(38) 順徳天皇皇子彦成王の子孫についてはNo.17②③⑤は彦成王子孫を記さないのに対し、No.111920は記しており、どちらがB類本来の形かは定かでない。

(39) 『宣胤卿記』長享二年二月二日、三年正月二日、二月四日・十五日・二十六日、三月一日、一七日条に関連記事が見える。『親長卿記』長享二年二月三日・五日・八日・一二日条には甘露寺親長が將軍より「系図」の書写を命じられたことに関する記事があり、あるいはこれも「紹運録」書写と関連したものである可能性がある。

(40) 早稲田大学図書館所蔵外記平田家本（No.45）は「本文」として長享二年中御門宣胤奥書、ついで同じく「本文」として文龜三年権大僧都宗秀、大永六年権律師斎怡奥書、さらに「写本文」として藤原某の奥書、平田職永延宝奥書を持つ写本であるが、No.30とは多少の記事の出入りがあるもの、および同内容である。

(41) 三千院所蔵「帝王系図」は、正親町天皇を「今上」とし、誠仁親王を「若宮」と記す室町後期の写本である（三千院ほか）。

(42) 『尊卑分脈』の冒頭二巻に帝王系図が収められていたかどうかについて、皆川完一氏は『尊卑分脈』に見える「見帝王系図」の記載は他書を示した可能性があり、また「現行の『本朝皇胤紹運録』等の皇室系図では、二巻分の分量になるか否かの疑いもある」などとして慎重に「不明」とされておられる（皆川九二—九三頁）が、『本朝書籍目録』に複数の「帝王系図」が挙げられていることから知られるように、それが『尊卑分脈』所収でない限り、単に「帝王系図」

と記しただけでは系図が特定されず、公定がそのような漠然とした記述を行なったとは考えにくいのではないだろうか。拙案のように考えれば、『尊卑分脈』『尊卑分脈』所収帝王系図は二巻に及ぶ詳細なものであった可能性もあるし、また巻一は系統略図的なものであった可能性も考えられるであろう。

(43) この点で、飯豊天皇（飯豊青皇女）の箇所に「皇代^{（略）}歴云、是不^{（略）}注諸王系図、依^{（略）}和銅奏聞入之云々」と『皇代曆』の記事が抜書きされている（『扶桑略記』飯豊天皇条にはさらに詳しい記述が見える。同書では「諸王系図」を「諸皇之系図」に作る）のは象徴的である。

(44) 善統親王（順徳天皇皇子）王子深恵など、若干、第二類に見えて『帝王系図』諸本に見えない人名・記事がある。

(45) 宮内庁書陵部所蔵「帝王系図並勘例」（F九—五三）所収系図や東山御文庫勅封四一—三六「帝王略系図」は主に天皇の系譜関係のみを記す簡潔なものであるため、除外する。

（補注）脱稿後に追加調査を行なった筑波大学附属図書館中央図書館所蔵本（No.①）は第一類Aではあるものの他の写本と異同が大きいいため、第一類A7とすることとした。

参考文献

- 厚谷和雄「本朝帝系抄」『日本歴史』五二七 一九九二年
飯田瑞穂 a 「尊卑分脈雑記」『飯田瑞穂著作集』五 吉川弘文館 二〇〇一年 初出 一九六七年
b 「帝王系図」加藤友康他編『日本史文獻解題辞典』吉川弘文館 二〇〇〇年 初出一九八八年
井出原太郎 a 「群書類従」の活字本「名著通信」六 一九七七年
b 「新校群書類従」の特色「名著通信」七 一九七七年
今井育雄 a 「川俣馨一と国語伝習所」『名著通信』一〇 一九七七年
b 「新校群書類従」と川俣馨一「名著通信」一九 一九七八年
太田善磨「統群書類従完成会創始者太田藤四郎のことども」『ぐんしよ』再刊一〇一九九〇年
小倉慈司「神代系図」毎日新聞社「至宝」委員会事務局編『皇室の至宝 東山御文庫御物』一 毎日新聞社 一九九九年
小野信二「本朝皇胤紹運録」『群書類従完成会 一統群書類従完成会 一九八六年 初刊 一九六二年
菅 政友「本朝皇胤紹運録」『菅政友全集』国書刊行会 一九〇七年 成稿一八八二年

菊地康明「皇胤系図」「群書解題」一 続群書類従完成会 一九八六年 初刊一九六二年

宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題』歴史篇 養徳社 一九五〇年

三千院ほか編『京都大原・三千院の名宝展』朝日新聞社 二〇〇〇年

田口卯吉 a「群書類従の後に書す」鼎軒田口卯吉全集刊行会編『鼎軒田口卯吉全集』

一 大島秀雄 一九二八年 初出一八九四年

b「群書類従第二版の巻末に書す」同書所収 初出一九〇二年

田島 公「近世禁裏文庫の変遷と蔵書目録」同編『禁裏・公家文庫研究』一 思文閣

出版 二〇〇三年 初出二〇〇〇年

田邊勝哉「皇室の御系譜に就いて」『国学院雑誌』三四―一二 一九二八年（『互助』

一一 一九二九年、掲載の同題論文もほぼ同内容）

谷森善臣『嵯峨野の露』青山堂書房 一九〇二年

長 連恒「群書類従最初の翻刻本」『歴史と国文学』四―四 一九三二年

嗣永芳照「本朝皇胤紹運録」『日本歴史』古典籍「総覧」新人物往来社 一九九〇年

初出一九七五年

長沢伴雄『令・水鏡・増鏡・続紀・三代実録・紹運録考』（静嘉堂文庫所蔵）

中村一紀「本朝皇胤紹運録」毎日新聞社「至宝」委員会事務局編『皇室の至宝 東山

御文庫御物』一 毎日新聞社 一九九九年

中山信名「塙保己一伝」文政二年（一八一九）（『群書類従正統分類総目録・文献年表』

続群書類従完成会 一九五九年、所収）

花見朝巳「本朝皇胤紹運録」『新校群書類従』三 内外書籍 一九三〇年

伴 信友「皇胤紹運録本名由来考」『比古婆衣』一六 弘化三年（一八四六）以前成（林

陸朗編・校訂『増訂 比古婆衣』下 現代思潮社 一九八七年、所収）

皆川完一「尊卑分脈」同・山本信吉編『国史大系書目解題』下 吉川弘文館

二〇〇一年

松菌 齊「中世公家と系図」歴史学研究会編『系図が語る世界史』青木書店

二〇〇二年

村田正志 a「後小松天皇の御遺詔」『国史学』四七・四八合 一九四四年

b「帝系図と本朝皇胤紹運録」『村田正志著作集』一 思文閣出版

一九八三年 初出一九四九年

八代国治『長慶天皇御即位の研究』改版 明治書院 一九二七年 初版一九二〇年

〔付記〕脱稿後に未調査の写本のうちの幾つかについて追加調査を実施した。その内容については別表二を参照されたい。貴重な史料の閲覧を許可していただいた関係諸機関には深謝申し上げます。なお、本稿は、科学研究費補助金による研究「目録

学の構築と古典学の再生―天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明」（学術創成研究費、研究代表者田島公）の成果の一部である。

（国立歴史民俗博物館研究部）
（二〇一〇年八月二七日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了）